

## 2023 フクシマ連隊キャラバン報告書

全港湾東北地方青年婦人部

書記長 渡邊健也

2019年以降、コロナの影響があり仲間たちが集まることができませんでしたが、今回のフクシマ連隊キャラバンでは北は北海道、南は沖縄までの全国各地から集結することができたことすごく嬉しく思います。

初日の団結式では、全体主催の平和フォーラム藤本代表に激励の言葉をいただき、脱原発に向け気持ちがより一層高まりました。また、全国から集まってくれた仲間たちから決意表明をしてもらいました。決意表明をしてくれた仲間たちの中に、原発を抱えている地域の人や被災した人を友達に持つ人がいて、それぞれの原発に対しての思いを聞けました。改めて脱原発という目標に、立ち向かおうと自分自身も決意を固めることができました。

現地フィールドワークでは、地元に住む身として講師をやりました。全港湾ではない他労組の方々に当時、津波でぐちゃぐちゃになった町や、原発事故の影響で避難指示があり、帰れなくなった場所などを説明しました。原発事故があったことで、元々住んでいた家に帰れなかったり、小さい頃から遊んでいた友達と離れ離れになってしまったり、慣れていた仕事を変えなければならなかったりと、避難を余儀なくされた人の話も講義の中に組み込み話しました。フィールドワークの最後には、浪江町に住む人で結成された、津島原告団の方の家に訪問することができました。12年間も放置された家は想像をはるかに超えるくらいボロボロで、避難解除されたから「また住もう」とは思えないほどの家が変わり果てていました。一度原発事故があるとこのような悲惨な思いをする人がたくさんいることを目で見て分かり、貴重な体験をすることができました。

福島駅前で行った凱旋行動では、原発事故を風化させない取り組みとして、ひとりひとり原発に対しての思いを声に出して、発信しました。署名活動は初めてのことで、どのように声かければいいのか分からないまま手探りで始まりました。全国の仲間たちの中で署名活動をしたことがある人がいて、その人をお手本にし、30枚弱の署名を集めることができました。このような結果になったのは仲間たちの助けがあったからだと思います。

茨城行動では、各自治体に要請行動をしました。各自治体に要請文を読み、原発推進派や反対派、処理水の海洋放出問題についての考えを聞きました。各自治体の考えがそれぞれ違うので、伝える難しさを感じました。各自治体への質問や、我々の思いをぶつけるという、キャラバンでしかできない良い経験ができました。毎年、やっている行動ということもあり、毎年ご苦勞様です。という自治体もあり、続けることの大切さを知りました。これからも続けていきたい行動の一つになりました。

最終日は代々木で開催された集会に参加しました。全国各地からたくさんの労組、団体が集結し 4000 人規模の集会になりました。キャラバン隊の矢内団長が 17 日～20 日までやってきた運動を、壇上で全国各地の人たちに話してくれました。全国各地の人たちが我々の運動に対して温かい拍手で歓迎してくれて、「よく頑張った」「よくやってくれた」などのたくさんの励ましの言葉もかけてくれました。全国の人たちに向けて自分たちがやってきた行動を話すのは難しいことだと思いますが、いつか自分もやってみたいと思うほど矢内団長は輝いていました。

最後になりますが、今回のキャラバンは 4 泊 5 日という日程で、内容が濃くハードなスケジュールでしたが、全国から熱い気持ちを持った仲間たちが集結してくれました。東北地方青年婦人部の薄井部長が全国の仲間たちに、福島の実状を見てもらい、肌で感じて欲しいという思いや、毎年自治体要請を行っている茨城県の対応を見てもらいたいという熱い思いがあったからだと思います。そして、その思いに応えてくれた全国の仲間たちに感謝し、福島から全国、そして世界へ脱原発に向けて進んで行きたいです。